

伝送便カレッジ 第2回

小幡道昭

2013年4月14日

1 / 136

労働

『資本論』では...

- ① 「商品の価値の大きさは、その生産に必要な労働時間できまる」というかたちで登場。しかし、労働とはそもそも何が.... という説明はない。
- ② いろいろな商品は、貨幣を用いて等価交換されるのが原則。
- ③ 等価交換では、モウケがでない。つまり、資本の運動は不可能。
- ④ じゃ、不等価交換なら.....? 「貨幣の資本への転化」という章。
- ⑤ しかし、資本家は労働力という商品を見つける。その価値は、ほかの商品と同じように、その生産に必要な労働時間できまる。
- ⑥ 労働力は労働者の生活を通じて再生産される。
- ⑦ つまり、一日の労働時間の価値は、労働者が一日生活できる生活物資の生産に必要な労働時間によってきまる。
- ⑧ この生活物資の量は「歴史的、文化的に」いろいろ変わるであろうが、ある社会をとってみると平均的に与えられている。ここまでが「貨幣の資本への転化」という章。
- ⑨ といって、第5章「労働過程と価値増殖過程」に進む。

3 / 136

いよいよ「労働そのもの」が登場

- このようにのべたあと、第5章の第1節「労働過程」に進みます。
- ここで、舞台は大きく回転。
- 入っていったのは、資本家と賃金労働者だったのですが、
- ここでは、あらゆる社会に共通する、労働そのものが問題にされます。
- つぎのように....

4 / 136

労働過程の管理

- 「どのような特定の社会的形態にもかかわりなく考察されなければならない」のは、なぜか?
- 「使用価値または財貨の生産は、資本家のために、資本家の管理のもとで行なわれることによって、その一般的な本性を変えはしない」から。
- これはちょっと問題かも....
- 一般的な本性は変わらないかもしれないが
- 労働過程が、どのように資本家の管理のもとで変わるのか、という問題が隠されてしまうおそれがある。
- 使用価値または財貨の生産の側面だから、「特定の社会的形態にもかかわりなく考察」するというのではなく、
- 労働が人間の本性に結びついており、どのような人間社会でもその基礎にあるから、そうするのだと考えるべき。
- こうすることで、「資本家の管理」のもとで労働過程がどのように変容するのか、考える基礎となる。

5 / 136

「労働過程」の内容は...

- しかし、理由はどうであれ、「特定の社会的形態にもかかわりなく」=「あらゆる社会に共通する」として展開される、「労働過程」の内容はすばらしい。
- 人間労働の本質が、一般的、抽象的なかたちで、「概念化」されている。
- ここが、今日のハイライト、詳しくみてみます。

6 / 136

ポイントは...

- 「過程」とか「運動」とか、時間の流れのなかで生じる事態に対して、
- これを「媒介し、規制し、管理する」というのだが、
- 労働者が同時に、コントロールする主体と、コントロールされる対象に二重になっている。
- 意識と「自分の肉体に属している自然諸力、腕や足、頭や手」の関係である。
- 労働力というのは、このセットのことなのだ。意識ぬきのパワーじゃない。
- この「労働力」が、外界である「自然」に作用し、反作用をうけるかたちになっている。

7 / 136

さきに自分の頭のなかで建築している

- ここがいちばん肝心なところ....
- 「労働とは意識的なコントロールだ」といった以上、
- 「そもそもコントロールとはどういうことか？」が問題になる。
- 「目的」に向かって「行動の仕方を法則として規定し、彼が自分の意志をそれに従属させる」こと
- これが人間に特有か。ミツバチだってそうしてないか?
- 違いは、「目的」と「行動」の分離
- さまざま異なる「目的」に対して労働できる。
- なぜか?
- 「建築する以前に自分の頭のなかでそれを建築している」

8 / 136

構想と実行の分離

- はじめに、結果をイメージして、次に、行動する、というのは、どういときか。
- しかし、個人のレベルでは、この分離は曖昧。
- だいたい目的を定めて、追求しているうちに、最終的な目的もハッキリしてくる。
- 論文を書いているときなど、明らかにそういう感じです。
- でも、マルクスのいうように、まずはじめに、目的 = 結果をカッチリ固めて、それにしがたって行動する、という場合もある。
- どういときか？
- もっとも広くいえば、他人と関係するとき。
- つまり、人に何か頼むとき、人のために何かするとき。
- こういときは、目的をハッキリ伝える必要がある。
- 広い意味でのコミュニケーション能力が、目的の伝達を可能にする。
- これが人間に特有。ミツパチのダンスっていうのもあるが、人間の比ではない。

9 / 136

目的意識性と社会性

- 要するに、目的意識的だという人間労働の特徴づけは、一人ひとりの労働者個人の問題としてみると、曖昧なところを残しているが、
- 労働の世界を他人と結びつけた社会的な場に広げてみると、明確に現れる。
- 逆に、目的意識的な活動ができるから、人間社会の特徴が生まれる、といってもよい。
- こうしたなかで、他人のための目的を遂行するということになると...
- 次のような『資本論』の説明は、この煩勞 (toil and trouble) 化の関係をいれるとはっきりする。

10 / 136

相互のコントロール

- 人間の労働の最大の特徴は....
- 目的先決、手段として身体活動(広義の)をコントロールして、実現。
- 「構想と実行の分離」
- だから、他人のためにはたらくことができる(自分の欲求の充足のためだけでなく)。また、他人に仕事を依頼することができる。
- しかし、このためには、目的を伝達可能なかたちにしなければならない。
- 人に頼む、というはけっこう面倒。コミュニケーション活動。
- 相手にうまく伝えられなければ、相手の目的遂行能力を活かすことができない。

11 / 136

タテのコントロール

- 馬をはたらかすことと、人をはたらかすこととの差。
- 馬に行き先をいっても無理、御者に行き先を伝え、御者が馬をコントロールするほかない。
- タクシーの運転手に行き先をいえば、目的地に向かって、おそらく一番近いルートを選んで連れていってくれる、はず。そう、信じたい... 郵便の配達、は？
- さて、ここまでは、対等な人と人との水平な関係で、「構想と実行の分離」を考えてきたが....
- 他人の目的を自分の目的として「引き受けて」主体的に遂行できる、という人間の基本的な能力には、人に命じて特定の目的を実現させるとい、上下の関係に変わる可能性を秘めている。
- どのようにして、労働者の主体性をコントロールするか、という問題。この場合のコントロールは、支配という意味。
- 『資本論』の議論を追ってみよう。という思うのですが、時間がないので、結論を急ぎます。

12 / 136

機械化による支配

- 『資本論』のこの後の展開をみると
- 生産手段の発展、とくに機械の導入によって、労働者の主体性は、コントロール可能になる。
- さらにいうと、解体されて、どんどん消えてなくなってゆく。
- 機械に従属した労働、機械の部品としての労働、になってゆく、という側面が強調される。
- たしかに、物的生産の局面をみると、そういってよいようにも思えます。
- しかし、すべての労働がそうなるわけではない。
- 物的生産の場、労働が徹底して機械されたところでは、労働者が押しだされてゆきます。
- しかし、労働がそれでなくなるわけではない。

13 / 136

労働概念の広義化

- 押しだされたさきで、依然として人間の労働は存在し続けます。
- 振り返ってみると、マルクスの労働過程における労働の概念は、
 - ① 人間に本質的な行動のしかたとして、たいへんに広い概念であり、
 - ② モノを生産する局面だけではなく、人間の欲求充足の全領域に関わる概念に拡充しうるものでした。
- 今日、先進資本主義諸国の現実をみると、
- 一方では、機械化の促進が雇用の収縮を生んでいる現実がありますが、
- 他方で、雇用の場が物的生産の外側の領域に広がっています。
- 生産だけではなく、広義の消費の場を取り込んだかたちで、人と人の関係に、資本と賃労働の関係が浸透しています。

14 / 136

批判的に読む

- 大学でも、病院でも、介護施設でも...
- こうした広い意味での労働の場で、資本による労働者のコントロール = 支配の実態を捉え、これを根底から覆すことが、これからの社会主義の課題。
- 資本と労働の対立のフロンティアはここにある。
- 『資本論』の「労働過程」にはこうした手がかりが潜んでいるのですが、
- それを自分のものにするには、今日私なりに試みたような(個体的労働観批判)批判的な読み方が欠かせないと思います。
- 次回は労働の組織性の問題をさらに追求してゆきます。

15 / 136